# すがわらでんじゅてならいかがみ

## 菅原伝授手習 鑑

#### (解 説)

丞 親子の別れを描 衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目 相と苅 延享三年(一七四六)八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左 屋姫 の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、 いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれてい 四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれ の段 ・ます。 に管 切に

#### (あらすじ)

時平は、

菅丞相を邪魔に思ってい

た。

【初段】延喜帝 の御代、左大臣藤原時平、 右大臣菅原道真(菅丞相)が政治の中心となっていたが、反逆心のある

帝は病 のた め 渤海 国からの使者に対し、弟君の斎世親王が名代となる。

梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は斎世親王の 菅丞 相 の佐太村(現在の大阪府守口市内)の領地は、白太夫(四郎九郎)という百姓が預かっており、白太夫には、

するが、 親 時平の家来が詮議に来たため、 王は、 天皇 0 病気平癒祈願の参拝の折、 親王と姫は、行方をくらまし、 桜丸と女房八重の手引きで、 その後を桜丸が追う。 苅屋 姫 (菅丞相 の養女)と密会を

舎人(皇族などにつかえる下級役人)となっていた。

方、 名筆 4の誉れ 高 い菅丞相は、 以前、 不義の科で勘当していた武部源蔵を呼びだして、 菅家 の筆法を伝授 す

る。

め、 握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)する。 時 平は、 丞 相 は 斎世親王と苅屋姫の行方が知れないのは、 閉 門 流罪となる。 危険を感じた舎人梅王丸は、 菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を 丞相の実子菅秀才を源蔵夫婦に預ける。 そのた

役 丞 声に止 を知り、 【二段目】桜丸は斎世親王と苅屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事 人判 相 土 師 0 罪 め 官 0 代輝 られるが、 が 里では、 目会おうと行列の後を追う。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、 重くなるとして許されな 国 0 覚寿が、 計ら 不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像 ĺ で丞 丞 相 相 が罪に問 行も土 () わ 師 苅屋姫は、 机 ^ と向 たのは苅屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻する。 かうことになる。 姉、 立 田 0 前に伴われて実母覚寿の また、 斎世親王と桜 丸 ĺ 、る道 は 都 対面を願うが、 /明寺 そ と別 れを菅丞 へ 向 7 かうが、 があ 相 菅 0

を知っ たが、 の木像で、人々 立 田 そ て宿弥太 0 机 前 を 0 知 夫、 は 郎を刺す。そこへ、輝国ら本当の迎えが来るのだが、実は、 っ 宿 た 奇跡に驚く。そして、 立 弥 太郎とその父土 田 0 前 を殺す。 偽 師 兵衛 の迎えが来て丞 全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺される。 は、 時平に頼まれ、 相 を連 机 て行 偽 の迎えになり丞 っ たあと、 偽 の迎えに連れ 覚寿 相 を連 は 立 田 机 て行 0 出そうと計 前 か が 机 殺 されれ たの 画 は 逐相 7

丞

相は覚寿や苅屋姫と別れて、

名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのであった。

るばかりであった。

父の賀の祝を済ませてからと、 【三段目】梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争うが、 その場は別れ る。

〔喧嘩の段〕 祝 の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八 白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、 重が集まり仕度をしてい . る。 梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始 四郎 九郎は七十の祝に白太夫と名を改 め 白太 る。

現 机 丞 てきた白太夫はそれを見ながら何も言わない。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、 相 流 罪 の責任をとって切腹する。八重も後を追おうとするが、 物陰に潜 んでい 納戸に忍んでいた桜丸が た梅王丸夫婦に止

夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、

梅、

松、桜のうち、

桜の枝を折ってしまう。

る。

白太

夫は

八重を梅王丸夫婦に託

して筑紫へと向かうのであっ

た。

現 か み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、 へ、子供の母親がもどる。実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたという。 っていたが、 〔寺入り・寺子屋の段〕 れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやっと菅丞相 りの子供、 四段目】太宰府の菅丞相は時平の反逆を知り激怒し、雷神となって都へ飛ぶ。 小太郎の首を切ってしまう。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行 これを時平に知 一方、 られてしまい、 武部源蔵夫婦は、 首を討てと命じられる。 京のはずれで寺子屋をいとなみ、 の恩に報い 源蔵は思いあまって、 る事が出来たと語るのであっ 丞相 御 若君菅秀才を我が子として匿 台所は の御台所は北嵯峨に隠れ住 山伏 その日寺入りしたば に連れ 去ら 松王丸も 北 嵯峨

(一般社団法人 義太夫協会発行)

で御台所を救

( )

出

したのも、

実は松王丸で、

若君と親子の対面をする。

### 喧嘩の段

さして出でて行く。

「コレ千代さん、年寄らしやつても物覚えがよいこ

と。こなさんやこの春は氏神様知つてゐる。八重さ

んは今が初め」

違ひ、物忘れする子供達。 「言はしやんすりやその通り。物覚えのよい親御に 松王殿何故遅いぞ」

「こちの夫も何故見えぬ

「但しは来ぬ気か」

「今日見えいでよいものかいな。それこそそこへ松

王殿」

「エヽこれ、女房を立ちそに立たして、刻限過ぎた

を知らずかいのう」

「ヤアベリーーと姦しい。時平様の御用あつてそ

付けたを忘れたか。 れ終はねば動かれぬ。先へ参つてその訳言へと言ひ 梅王、 桜丸もまだ来ぬさうな。

親父殿も内にござらぬ」

「サア、その親父様は八重様を同道で、もちつと先

に氏神参り、兄弟衆はまだ見えぬ」

も、主なしの扶持放され。用もない和郎達が遅い 「ソレ見いな。遅いといふ俺は主持ち。 梅王も桜丸 . D

がほんの遅いの。 お春殿、 そぢやないか」

て来かゝり突つかゝり、 松王には顔振り背け、 Ł

詞の端にも残る意趣。

梅王も日足は長ける急い

「お千代殿、今日は大儀。コリヤ女房共、親人と桜

丸、八重もこゝには何故ゐやらぬ」

お二人は宮参り」

「ムヽ、桜丸はどうして来ぬな。アヽ、待ち兼ねる

「イヤ、今も松王様のお尋ね、桜丸様はまだ見えぬ。

者は来いで、 胸の悪い見とむない面構へ」

Ł, 梅王に当てこすられ、 松王が一徹短慮

「あたぶの悪いねすり事、 言ひ分あらば直きに言や

れ

「ム、 なんのわれに遠慮せう。 わが面構へを見る

度々、ゲイ――と、虫づが出るわい」

「ム、プハヽヽヽ、ハレ申したり腹の皮。この松

王は生れついて涙もろい。桜丸やそちが様に、 扶持

放されの痩せおとがひ。ひだるからうと思ふてやる

が、 兄弟の 誼 だけ」

持が碌な扶持かい。鉄丸を食すといへども心汚れた 「ナニ、扶持放され。扶持放されと笑ふ奴が喰ふ扶

れた時平が扶持、ありがたう思ふはな、人でなしの、 る人の物を受けずとは、八幡大昔薩の御託宣。 心汚

猫畜生」

「ヤア畜生とは、舌長な梅王。今一言言ふて見い」

「ホヽ、望みなら易い事。 畜生、 畜生々々、どう畜

生

と松王丸、刀の柄に手を掛くれば、梅王も反り打ち 「もう赦されぬ」

返し、詰め寄り詰め寄る二人の女房

「これはマアおとましい気が違ふたか松王殿

と、千代が夫を抱き留むれば、

「七十の賀を祝ひに来て、 親父様に逢ひもせず、 反

り打つてどうさしやる。 祝ひ日に抜いてよいか、

と、刀の柄にしがみつく、女房春を取つて突退け、

ちの人梅王殿\_

「七十の賀でも祝ひ日でも、 堪え袋の破れかぶれ、

留め立てして怪我するな。コリヤ松王、遅れたな。 女房が留めるを幸ひに、頬げたに似ぬ腕なしめ」

て松王には慮外の雑言。 「オヽ、留めらるゝを幸ひとは、わが心に引き比べ 身が女房が留めたより、そ

堪え~~、堪えたがもうたまらぬ。真剣の勝負は親

ちが女房が親にもまだとの一言。肝先へきつと当り、

人に逢ふての後、それまでの腹癒せに、砂かぶらさ

ねば堪忍ならぬ。千代にこれを預ける」

Ł, 両腰抜いて放り出し、 裾引からげ身拵え。

「オヽ畜生めがコリヤよい了簡。 桜丸が来るまでは

松王が命松王に預ける

同じく両腰放り捨て、

「刃物を渡せば血はあやさぬ。女房ども邪魔するな」

王落ち様に諸足かけば梅王丸、真逆様に落ち重なり、 とつゝと寄つて縁より下へ踏み落とせば、早速の松

合ひ、捻ぢ付け引伏せ蹴つ踏んづ、双方力も同い年、 掴み合ひ叩き合ひ、組んでは離れ、 離れてはまた組

> れもせふかと気遣ひ半分、 血気盛りの根比べ、千代と春とは二人の両腰、 傍へも寄られず、『ハア 取ら

と、心をあせり気を揉み上げ、 「どちらが勝ちも負けもせず、叩き合ふたが二人の

存分。梅王殿もふよいわいな」

「松王殿もう置かしやんせ。やめて~~」

と言ふをも聞かず、

「勝負つかでは無駄働き。 投げてくれん」

る、肩先捻つてがつくりさせ、横に抱へる松の木腕、 と松王丸、嵩にかゝつて押す力、

怯まぬ梅王突掛く

方一度にこけかゝり、凭るゝ拍子に桜の立木、 劣らぬ肘骨梅の木腕、絡みもぢつて押し合ふ力、双 土際

に驚く相嫁同士、二人が勝負も破れ相撲、共に呆れ 四五寸残る木の上はぽつきりぐわつさりと、折れた

て手を打ち払ひ、うろつく中へ早や下向、

「アレ、親父様のお帰りぢや、白太夫様の」

と言ふ声に、二人は肩入れ裾下ろし、腰刀差す間も

### 寺入りの段

習ふ子の中に交はる菅秀才、武部源蔵夫婦の者、 一字千金二千金、三千世界の宝ぞと、教へる人に

労

はり 傅 くきわが子ぞと、人目に見せて片山家、芹 かく、教へる人は取分けて世話をかくとぞ見へにけ 清書きを、顔に書く子と手に書くと人形書く子は頭 生の里へ所がへ。子供集めて読み書きの器用不器用

と、見せるは十五のよだれくり、若君はおとなしく、 ひするは大きな損。おりや坊主頭の清書きした」 「コレ皆これ見や。お師匠さんの留守の間に、手習

る。中に年かさ吾作が息子、

と八つになる子に呵られて、 事書かずとも、本の清書きしたがよい」

「一日に一字学べば、三百六十字との教へ。そんな

「エヽませよ、ませよ」

と指差して、誂戯かゝるを、残りの子供、

「兄弟子に口過ごすよだれくりめを歪めてやろ」

と、手ん手に卦算振り廻す、自然天然肩持つも、伝

はる筆の威徳かや。主の女房奥より立出で、

限つて連合ひの源蔵殿、振舞ひに往てなれば戻りも「またこりや例の諍ひか、おとましや~~。今日に

知れぬ。ほんに~~こなた衆で一時の間も待ち兼ね

る。今日は取分け寺入りもある筈。昼からは休ます

程に、皆精出して、習ふた~~」

「ソリヤまた嬉しや休みぢや」

と、筆より先に読み声高く。

「いろはに」

「この中は御人下され」

「一筆啓上、候べく」

女房の、七つばかりな子を連れて、

の、男が肩に堺重、文庫机を担はせて、

利発らしき

「頼みませふ」

「こちらへお這入り遊ばせ」と言ひ入るゝ、内にもそれとはや悟り

と、言ふもしとやか

「アイ」

「アイ」

と、愛に愛持つ女子同士、来た女房はなほ笑顔。

「私事は、この村はづれに軽ふ暮してをる者でござ

りまする。この腕白者をお世話なされて下さりよか

らいののでは特合の可じたい、型を回じていたと、お尋ね申しにおこしましたれば、『おこせ、世と、お尋ね申しにおこしましたれば、『おこせ、世と、お尋ね申しにおこしました。

ました。内方にも御子息様がござりますげなが、ど話してやろ』と結構なお詞に甘へ、早速連れて参じ

のお子でござりますぞ」

「アイ、これが源蔵殿の跡取りでござります」

「これは~~よいお子様や。ほかにも大勢の子達、

いかいお世話でござりましよ

「アイ、御推量なされて下さりませ。シテ寺入りは、

このお子でござりますか、名は何と申します」

「アイ、小太郎と申しまして、腕白者でござります」

「イヤ。イヤ気高いよいお子や。折悪ふ今日は連合

ひ源蔵も、振舞ひに参られました」

「これはマア、 お留守かいな」

「お待ち遠なら、 私が呼びに参りましよ」

「イエーー、幸ひ私も参つて来る所があれば、その

うちにはお帰りでござりませふ。これ三助、その持

つて来た物、あなたの傍へ上げませ」

「アツ」と答へて堺重、榧に乗せたる一包み、内儀

の傍へ差出だす。

「これはマアーー言はれぬ事を」

重は子達への土産、取り弘めて下さりませ」

「イヤ、おはもじながらこの子が参つた印。この堺

と、言はねど知れし蒸物煮しめ、 わが子に世話を焼

豆腐、 粒椎茸の入れたるは、奔走子とこそ見へにけ

ħ

「これはマア何から何まで、取揃へて御念の入つた

こと。戻られたら見せませふ」

げます。コレ小太郎、ちよつと隣村まで往て来る程

「イヤモ、ほんの心ばかり。よろしうお頼み申し上

に、おとなしうして待つてゐや。悪あがきせまいぞ。

と表へ出づれば

御内証様、往て参じましよ」

「かゝ様、わしも行きたい」

と縋り付くを振り放し、

「嗜めよ。大きな形して後追ふのか。 御覧じませ、

まだ頑是がござりませぬ

「ソリヤ道理いな。ドリヤ、 小母がよい物やりましょば

よ。つゐ戻つてやらんせ」

と目で知らすれば、

「アイー、ついちよつと一走り」

と、後追ふ子にも引かさるゝ、振返り見返りて、下

部

寺子屋の段

引連れ、急ぎ行く。

「どりや、こちの子と近付きに」

と若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折からに、立ち帰

る主の源蔵、常に変りて色蒼ざめ、うち入り悪く

子供を見廻し、

づれを見ても山家育ち。世話甲斐もなき、役に立 「 エ 、氏より育ちといふに、繁華の地と違ひ、い

たず」

と、思ひありげに見へければ。心ならず女房立寄

り、

らぬが、山家育ちは知れてある子供、憎体口は聞 「何時にない顔色も悪し。振舞ひの酒機嫌かは知

へも悪い。 殊に今日は約束の子が寺入り、母御 が

連れて見へました。悪い人と思ふも気の毒、

機嫌

直して逢ふてやつて下され」

と、小太郎連れて引合せど、さし俯いて思案の体、

いたいけに手をつかへ、

「お師匠様、今から頼み上げます」

と、言ふに思はずふりあをのき、きつと見るより

暫くは、打守りゐたりしが。忽ち面色やはらぎ、

の御子息といふても、恐らく恥しからず。テさて 「テさて器量勝れて、 気高い生れつき。公家高家

そなたは、 マヽよい子ぢやなう」

機嫌直れば女房も、

「なんとよい子、よい弟子でござんしよがナ」

「よいとも~~上々吉。シテ、その連れて来たお

袋はいづくに」

「サア、 お前の留守ならその間に、隣村まで往て

来と言ふて」

と奥へやり、 「ムヽ、ムそれもよし、よし、 機嫌よう遊ばし召され」 大極上。まづ子供

と、若君諸共誘はせ、 「それ皆お隙が出た、 後先見廻し夫に向ひ、 小太郎ともに奥へ/~」

「最前の顔色は常ならぬ気相。合点の行かぬと思

子がありそふな、 ての機嫌顔。なほもつて合点行かず、どふやら様 気遣ひな聞かして」

ふたところに、今またあの子を見て、打つて変へ

と問 へば 源蔵

を庄屋の方へ呼びつけ、時平が家来春藤玄蕃、今 「ホヽウ気遣ひな筈。今日、村の饗応と偽り、某

一人は菅丞相の御恩を着ながら時平に従ふ松王

菅秀才、 数百人にて追つ取巻き、『汝が方に菅丞相の一子 丸。ヤこいつ、病み耄けながら検分の役と見へ、 わが子として匿ふ由、 訴人あつて明白。

ふや、返答いかにと』と退引きならぬ手詰。 急ぎ首討つて出だすや否や、たゞし踏込み受取ら 是非

ふて帰る道すがら、あれかこれかと指折つても、 数多ある寺子のうち、いづれなりとも身代りと思 に及ばず、首討つて渡さふと請合ふた、サ心は、

玉簾の内の御誕生と、

ても似 や浅ましやと、 付 かず。 屠所の歩みで帰りしが、天道 ハヽ 所詮御運 薦垂の中で育つたとは、似 の末なるか、 痛 のひ は L

さへ遁れたらば、すぐに河内へお供する思案。今 を鷺ともいはれぬ器量。一旦身代りで欺きこの場

かへ強きにや。あの寺入りの子を見れば、

満更烏

暫くが、 大事の場所」

۲, 語れば女房

一待たんせや。その松王といふ奴は、三つ子のう

ちの悪者。 若君 の顔はよふ見知つてゐるぞへ」

贋、とは思ふまじ。よしまたそれと顕はれたらば の変はるもの。面差し似たる小太郎が首、よもや 「サヽそこが一かばちか。生き顔と死に顔は相好

は若君諸共、 松王めを真二つ。残る奴輩切つて捨て、叶は 死出三途の御供と胸を据ゑた、 が 一 め 時

> 何とせん。 この 儀に当惑さし当つたは この難 儀

つの難儀。

今にも小太郎が母親、

迎ひに来たらば

で、ちよつぽくさ欺して見よ」 「イヤその手では行くまい。大事は小事より顕は 「イヤ、その事は気遣ひあるな。 女子同士の口先

るゝ。ことによつたら、 母諸共

「ヒエヽ」

「コリヤ、

若君には替へられぬ。お主のためを弁

へよ」

「オヽ、そふでござんす。気弱ふては仕損ぜん」

と、言ふに胸据ゑ、

「鬼になつて」

と夫婦は突立ち、互ひに顔を見合はせて、 弟子子といへばわ がが 子も同然

「サア、今日に限つて寺入りしたは、

あの子が業

12

か、母御の因果か」

「報ひはこちが火の車」

「追付け廻つて、来ませふ」

と、妻が嘆けば夫も目をすり、

「せまじきものは宮仕へ」

と、共に涙にくれゐたる。かゝるところへ春藤玄

蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕篭乗物、

門口に舁き据ゆれば。後には大勢村の者、付き従

ふて、

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「申し上げます。皆これことろーバイ(\\\\\

「申し上げます。皆これにをる者の子供が、手習

ひに参つてをります。もし取違へ首討たれては、

ヤモ取り返しがなりませぬ」

「ハイ~~~~~~~~どふぞお戻し下さっ 耳り返しが

れ

**₹** 

と願へば玄蕃、

「ヤアかしましい蠅虫めら。うぬらが餓鬼の事ま

で身どもが知つたことかい。勝手次第に連れ失せ

Š

と、叱り付くれば松王丸、『ヤレお待ちなされ、

「stin と、駕篭より出づるも刀を杖。

「憚りながら、彼等とても油断はならぬ。病中

ながら拙者めが検分の役勤むるも、ほかに菅秀才

病身の願ひ御暇下さるべしと、ありがたき御意のの顔見知りし者なき故。今日の役目仕終すれば、

趣き、おろそかには致されず。菅丞相の所縁の者、

この村に置くからは、百姓共もぐるになつて、

銘 々が伜に仕立て、助けて帰る、サ手もあること。

コリヤヤイ百姓めら、ざは――と抜かさずとも、

と、退引きさせぬ釘 鎹 、打てば響けと内には夫 一人づゝ呼出だせ。面改めて戻してくりよ」

婦、兼ねて覚悟も今更に、 胸轟かすばかりなり。

表はそれとも白髪の親仁、 門口より声高に、

「長松よ/~」

と呼出せば、

「オツ」

も似つかぬ雪と墨

と答へて出てくるは、腕白顔に墨べつたり、似て

「これではない」

と赦しやる。

「岩松はゐぬか」

と呼ぶ声に、

「祖父さん何ぢや」

顔木みしり茄子。

とはしごくで、出て来る子供の頑是なき、顔は丸

と、睨みつけられ

「詮議に及ばぬ連れ失せう」

ち遁れし」

「オ、恐や。嫁にも喰はさぬこの孫を、命の花落

と祖父が抱へて走り行く。次は十五のよだれくり、

「ぼんよ、ぼんよ」

と親仁が手招き、

と、甘へる顔は馬顔で、声きりぎりす

「とゝよ、おりやもこゝから抱かれて去の」

「オ、泣くな。 抱いてやらふ」

と干鮭を、猫なで親が喰はへ行く。

「私が伜は器量よし。お見違へ下さるな」

と、断り言ふて呼出だすは色白々と瓜実顔、

「ヤ、こいつ胡乱

と引つとらへ、見れば首筋まつ黒々、墨かあざか

は知らねども、

「こいつでない」

と突放す。その他、山家奥在所の子供残らず呼び

ました量り芋、子ばかりよつて立帰る。『スハ身出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が産

の上』と源蔵も、妻の戸浪も胴を据ゑ、待つ間ほ

どなく入り来る両人、

合ふた菅秀才が首、サア受取らふ、早く渡せ」「ヤア源蔵、この玄蕃が目の前で討つて渡そと請

と、手詰の催促、ちつとも臆せず、

「仮初ならぬ右大臣の若君、掻き首捻ぢ首にも致

されず。暫くは御用捨」

と立上るを松王丸、

逃げ仕度致してもナ、裏道へは数百人を付け置く、「ヤアその手は喰はぬ。暫しの用捨と隙取らせ、

顔は相好が変はるなどと、身代はりの贋首、それ蟻の這ひ出づる所もない。ガまた、生き顔と死に

もたべぬ。古手な事して後悔すな」

と、言はれてぐつとせき上げ、

んぐり返り、逆様 眼 で見様はしらず、紛れもな「ヤア要らざる馬鹿念。病み呆けた汝が眼玉がで

き菅秀才の首、追付け見せう」

「ム、その舌の根の乾かぬ内に、早く討て」

「疾く切れ」

据ゑてぞ入りにける。傍に聞きゐる女房は『こゝと玄蕃が権柄、『ハツ』とばかりに源蔵は、胸を

ぞ大事』と心も空、検使は四方八方に眼を配る中

にも松王、

机文庫

の数を見廻し、

「ヤア合点のゆかぬ。先達て去んだ餓鬼らを数ふ

れば、机の数が一脚多い、その倅はどこにをるぞ」

と見咎められて戸浪は『ハツ』と

「イヤこりや今日初めて寺、イヤアノ寺参りした

子がござんす」

「なに、馬鹿な」

「オヽそれ~~、これがすなはち菅秀才のお机文

庫

と、木地を隠した塗机、ざつと捌ひて言ひ抜ける。

「何にもせよ隙取らすが油断の元」

と、玄蕃諸共突つ立ち上る、こなたは手詰命の瀬

戸際、奥には『ばつたり』首討つ音、『はつ』と

女房胸を抱き、踏込む足もけしとむ内。武部源蔵

白台に、首桶載せてしづ//出で、目通りにさし

置き、

太切ない御首、性根を据ゑて、サ松王丸、しつか「是非に及ばず。菅秀才の御首、討ち奉る。いはゞ

りと、検分せよ」

けん、実と言はゞ助けん』と堅唾を呑んで控へゐと、忍びの鍔元くつろげて、『虚と言はゞ切り付

る。

ハヽヽヽ。今浄玻璃の鏡にかけ、鉄札か金札か「ムハヽヽヽ、なんのこれしきに性根所か

地獄極楽の境。家来衆、源蔵夫婦を取巻き召され」

女房戸浪も身を堅め、夫はもとより一生懸命、『畏まつた』と捕手の人数十手振つて立ちかゝる、

「サア実検せよ検分」

と、言ふ一言も命がけ、後は捕手向うは曲者、

玄

蕃は始終眼を配り、『こゝぞ絶体絶命』と思ふ内 はや首桶引寄せ、 蓋引明けた首は小太郎、『贋と

光らす松王が、 言ふたら一 天道様、 討ちら 仏神様、 ためつ、 と早や抜きかける戸浪は 憐み給へ』と女の念力、 すがめつ、窺ひ見て、 祈願 眼力

相違なし」

「ム、コリヤ、

菅秀才の首討つたは、紛ひなし、

地を拝し、

見合はせり。 と、言ふにびつくり源蔵夫婦、あたりきよろ~~ 検使の玄蕃は検分の、 言葉証拠に

L 「出かした~~よく討つた。褒美には匿ふた科赦 てくれる。 イザ松王丸、 片時も早く時平公へお

寿命は

万

々年、

悦べ女房

よりお 如 ,何様、隙どつてはお咎めも如何。 拙者はこれ 暇給はり、 病気保養致したし」

「オヽサ、

役目は済んだ、

勝手にせよ」

目にかけん」

と首受取り、玄蕃は館へ松王は、駕篭にゆられて、

立ち帰る。

出すばかりなり。 青息吐息、 夫婦 は門の戸ぴつしやり閉め、物をも得言は 五色の息を一時に、 胸なでおろし源蔵は、 「ほ . つ ニ 天を拝し 吹き ず

「ハア、ありがたや忝なや。凡人ならぬわが君の

見定めて帰つたは、天成不思議のなすところ。 御聖徳が顕はれて松王めが 眼がかすみ、 若君と 御

の松王めが目の玉へ、菅丞相様が這入つてござつ 「イヤもふ! 大抵の事ぢやござんせぬ。あ

り嬉しうて涙がこぼれる。 いふても瓦と黄金、宝の華の御運開きと、あんま たか、たゞし首が黄金仏ではなかつたか。似たと アヽヽ、ありがたや尊

や

と 悦び勇む折からに。 小太郎が母いきせきと、

迎ひと見へて門の戸叩き、

「寺入りの子の母でござんす。今漸々帰りました」

と言ふ声聞くよりまたびつくり、

と、妻が騒げど夫は胴据ゑ、

「一つ遁れてまた一つ、こりやマア何とどふせふ」

「コリヤ、最前言ふたはこゝの事。 若君にはかへ

られぬ。 工 、狼狽者め」

と戸浪を引退け、 門の戸ぐはらりと引開くれば。

女は会釈し、

「これはマア、御師匠様でござりますか。悪さを

お頼み申します。 どこにゐやるぞお邪魔であろ」

言ふを幸ひ、

「アヽイヤ、奥に、子供と遊んでゐます。連れ立

つて帰られよ」

と

真顔で言へば、

「ム、そんなら連れて帰りましよ」

と、ずつと通るを後より、たゞ一討と切り付くる、

刃鋭どに切り付くるをわが子の文庫ではつしと 女もしれ者引つぱづし逃げても逃がさぬ源蔵が、

受け止め、

刎ねる 刃 も用捨なくまた切り付くる文庫は二つ、

「コレ、待つた、待たんせコリヤどふぢや」と、

中よりばらりと経帷子、『南無阿弥陀仏』の六字

の幡、 顕はれ出でしは

「コハいかに」

見へにける。 小太郎が母涙ながら

と、不思議の思ひに剣もなまり、すゝみ兼ねてぞ

「若君、菅秀才のお身代り、お役に立てゝ下さつ

たか、 まだか様子が聞きたい」

言ふにびつくり

「シテー~それは、得心か」

「サア、 得心なりやこそこの経帷子、 六字の幡」

「ムヽ、 シテ其元は何人の御内証」

と、尋ぬるうちに門口より、

なかるらん。 「梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれ 女房悦べ、悴はお役に、立つたぞ」

と 聞くより『わつ』とせき上げて、 前後不覚に

取り乱す。

ヤア未練者め」

二度びつくり、『夢か現か夫婦か』と呆れて、言 と叱り付け、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は

葉もなかりしが。 武部源蔵威儀を正し、

「一礼はまづ後のこと。これまで敵と思ひし松王、

打つて変つた所存は如何に。いぶかしさよ」

と尋ぬ れば、

銘々に別れて奉公。情けなやこの松王は時平公に 「オ、御不審は尤も。存知の通り我々兄弟三人は、

従ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩受けたる丞相様

へ敵対。主命とはいひながら、皆これこの身の因

果。何とぞ主従の縁切らんと、作病かまへ暇 0

願ひ。『菅秀才の首見たらば暇やらん』と今日

代りに立つべき一子なくば 役目。よもや貴殿が討ちはせまい、なれども、身 いかゞせん。こゝぞ御

恩を報ずる時と、女房千代と言ひ合はせ、二人が

中の件をば先へ廻してこの身代り。机の数を改め

しも、 が性根を見込み給ひ、『何とて松のつれなからふ わが子は来たか、と心の蓍。菅丞相にはわ

ぞ』との御歌を、『松はつれない、つれない』と

(T)

が 世上の口に、 なくば 何時 かゝる悔しさ。 `までも、人でなしと言はれんに、 推量あれ源蔵殿、 持 悴 も生れも賤しくば殺す心もあるまいに、死ぬる子

きものは子なるぞや」

言ふに女房なほせき上げ、

持 「草葉の陰で小太郎が、聞いて嬉しう思ひませふ。 つべきものは子なるとは、あの子がためによい

たを、 手向け。 叱 思へば最前別れた時、何時にない後追ふ つた時の、 叱つた時の、 その悲しさ。 冥

行くと言ふて道まで往んで見たれどもナ、子を殺

さしにおこして置いて、どふマア内へ、どふマア

途

一の旅へ寺入りと、早や虫が知らせたか、

隣村

度見たさに、未練と笑ふて下さんすな。包みし祝 内へ、去なるゝものぞいの。死に顔なりとも今一

入りさすといふ、悲しい事が世にあらふか。育ち 儀 は あ の子が 香典、 四十九 日の蒸物まで持つて寺

致したでござらふ」

は媚よしと美しう生れたが、可愛やその身の不仕。

合せ。 何の因果に疱瘡まで仕舞ふた事ぢや」

と、せき上げて、かつぱと伏して泣きければ。 لح

もに悲しむ戸浪は立寄り、

「最前に連れ合ひが身代りと思ひ付いた傍へ往 『お師匠様今から頼み上げます』 と、 言ふた

親御 の身では お ·道理<sub>J</sub>

涙添

ゆれ

ば

時

が事

思ひ出せば、

「イヤこれ御内証。 コリヤ、女房も何でほへる。

夫婦 はおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を、 覚悟した御身代り、内で存分ほへたでないか。御 の手前もあるわい。ナニ源蔵殿、申し付けて

他人の私さへ骨身が砕ける。

「ア、イヤ、若君菅秀才の御身代りと言ひ聞かし

たれば、潔ふ首さしのべ」

「アノ、逃げ隠れも、致さずに、ナ」

「につこりと、笑ふて」

「アノにつこりと笑ひましたか~~、ハヽヽヽ。

ハヽヽ、ハヽヽハヽヽ、ムヽ。ア、アハヽヽヽヽ。

八つや九つで、親に代つて恩送り。お役に立つは出かしをりました。利口な奴、立派な奴、健気な

孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出だすは桜丸、

御恩送らず先立ちし、さぞや草葉の蔭よりも、う

らやましかろ、けなりかろ。悴が事を思ふにつけ、

思ひ出さるゝ出さるゝ」

と、さすが同腹同性を、忘れ兼ねたる悲嘆の涙。

「ノウその伯父御に小太郎が、逢ひますはいの」

と取り付いて、『わつ』とばかりに、泣き沈む。

「われに代はると知るならばこの悲しみはさす嘆きも洩れて菅秀才、一間の内より立ち出で給ひ、

まいに、可愛の者や」

と御袖を絞り給へば、夫婦は『はつ』と、共に浸

する有難涙。

「ついでながら若君様へ御土産」

と松王突立ち、

「申し付けた用意の乗物、早く~」

と呼ばはるにぞ、『ハツ』と答へて家来共、御目

通りに舁き据ゆる。

「はや御出で

「ノウ母羕かっ

と戸を開けば菅丞相の御台所、

「わが子か」

と御親子不思議の御対面。源蔵夫婦横手を打ち、

「方々と御行方尋ねしに、いづくにか御座なされ

L

「されば~~、北嵯峨の御隠れ家、時平の家来が

聞き出だし召し捕りに向ふと聞き、

某山伏の姿と

太郎が死骸、あの乗物へ移し入れ、野辺の送り営され、姫君にも御対面。コリヤ、コリヤ女房、小なり危い所奪ひ取つたり。急ぎ河内の国へ御供な

まん」

「ハア、アイ」

と返事のその内

に、

戸浪が心得抱いて来る、

死骸

を網代の乗物へ、乗せて夫婦が上着を取れば、哀

れや内より覚悟の用意、下に白無垢麻裃。心を察

して源蔵夫婦

「野辺の送りに親の身で子を送る法はなし。我々

夫婦が代はらん」

と立寄れば松王丸

骸を御供申す。いづれもは門火々々」

これは、

わが子にあらず。

菅秀才の亡

と門火を、頼み頼まるゝ。

旅へ寺入りの、師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏、六道郷台若君諸共に、しやくり上げたる御涙、冥途の

能化の弟子になり、賽の川原で砂手本。のうけ

いろは

書

日の夜誰れか添乳せん。らむ憂ゐ目見る親心、剣く子をあへなくも、散りぬる命、是非もなや。明

とは門火に酔ひもせず、京は故郷と立別れ、鳥辺と死出のやまけ越え、あさき夢見し心地して、あ

野指して連れ帰る。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。